



● .Net隊 ●

本プロジェクトは多くのサブチームから構成されていたが、その中で.Net隊という風変わりな名称のチームがあった。.Net隊とは内部設計と実装フェーズのみを担当する18名のチームで、メンバーはほとんどが入社1、2年目の若手であった（1年生が11名、2年生が3名、他4名）。もともと .Net隊は新入社員の教育という目的で立ち上げられたチームであり、体制上も本体のプロジェクトとは切り離された別プロジェクトという形態をとっていた。

.Net隊は2002年6月に編成された。これは本体のプロジェクトで内部設計が開始される2ヵ月前であり、それまでの間にオブジェクト指向やVB.NET等についてトレーニングを実施、開発作業に備えようという計画である。トレーニングがひととおり終わり8月になると、開発の実作業に移るため、我々（実は筆者も.Net隊の一員だった）は本体のプロジェクトが率いるフロアに引越しを行った。プロジェクトルームに入り自分たちの席を探していると、「.Net隊のかたですわね？ 席はこちらです。」と1人の女性に声をかけられた。我々はしばし考え込んだ。と言うのは、我々のプロジェクトは.Net隊などという名称ではなかったからだ（何という名称だったかは忘れてしまった）。我々が黙っているの、女性は何げんそんな顔をしている。どうやら、誰が名付けたのかは知らないが .Net隊というのは我々のことを指して、

しかもここでは完全に定着している名前のような感じだった。この日以来、.Net隊は我々のチームの本名となった（プロジェクトの各種資料にもこの名称が使われた）。

引越し後、.Net隊は、あるサブシステムのオンライン処理の内部設計、実装、テストを担当することになった。要員のほとんどが1、2年生というチームであっても生産性と品質が確保できるよう、我々は規範となる設計書を数パターン作成し、それをもとに一斉作業へ展開するという作戦を採用した。実装フェーズでの手戻りも防ぐため、設計の一斉作業展開の前に、各パターンでのプロトタイピングも実施した。この作業方式は実装フェーズ、テストフェーズへも適用し、結果としては他チームに引けを取らない期待通りの生産性と品質が得られたと思っている。もちろん、全メンバーが生産性と品質向上に対する強い意識を持ち続けてくれたことも成功の理由に加えなくてはならない。

2003年2月末、.Net隊は担当作業を完了し、チームとしても解散をした。新入社員教育というミッションも達成し、.Net隊のメンバー達はいくつかのチームへ分かれ、システム本番稼働まで精力的に活動を続けていった。正直に言うと、.Net隊という名称には最初かなり違和感を持っていた。なんとなくお子様軍団的なニュアンスが感じられたからである。.Net隊が編成されてから丸2年が経過した今日この頃、.Net隊が懐かしく思い出される。

(T.Y.)

● インドのオフショア開発 ●

年金管理システムにおける登録画面の開発については、その多くをインドのNIIT社に一括発注した。筆者はその中で発注/受入責任者という役割を担った。開発自体はNIIT社で行い、の技術者1名、および通訳兼オフショアチームとの窓口となる人物1名をオンサイトに配置した。

NIIT社とのコミュニケーションは基本的に英語で行った。オフショアチームとは、週1回の電話会議、主要メンバーが来日してのQA会、また、通常時はメールにてコミュニケーションを図った。開始当初のQA会においては、年金業務の概要、アーキテクチャ、各種標準、実装方法、仕様の説明等を実施し、1週間夜遅くまで会議室にこもりきりであった。開発の進め方、品質に対する考え方等についての相違や、膨大な数のQA、また、言語の違い等により、お互いがきちんと理解するまでに時間を要した。

オフショア開発の進め方としては、まず、サンプルとなる画面をいくつか抽出し、それらのプログラミングを依頼した。プログラミング完了時点で、それらの画面に対し、詳細なコードレビューを行うことにより品質の安定化を図った。残りの画面については、サンプル画面を参考に、NIIT社のテクニカルリーダーがプログラミングの標準を定め、メンバーはそれに従いプログラミングを進めた。今回発注した画面は、全体的に処理方式が類

似しており、一度サンプルを作成してしまえば、後続の作業ではそれに倣ってプログラムを作成することが可能であった。オフショアリングのポイントは、このように発注対象に類似性があり、標準化した上で作業を実施できることが重要であると感じた。

年金管理システムは、完全に日本語化されており、日本語を理解できる技術者が数名しかいない中での開発は非常に困難であった。日本語化に対応するため、翻訳ツールを作成した上で、英語で制作を実施後、日本語に変換してからテストする作業形態となった。さらに、年金用語は、我々が普段使用しないような単語が多いため、翻訳ツールの辞書登録についても、非常に大変な作業であった。2000語以上の単語について、1語1語意味の確認を行い、意味を取り違えることのないよう配慮した。

発注から8ヵ月程ですべての画面が、要求を満たす程度の品質で納品され、今では特に不具合が発生することなく稼働している。筆者としても、インド人と仕事をするのは初めての経験であったが、彼らの仕事に対する真摯な態度、および技術を習得することに対する貪欲な姿勢等、見習うべきところが多くあると、彼らと共に過ごすことによって肌で感じることもできた。オフショアリングが国内雇用の空洞化を招くという声もあるようだが、そうならないためにも、彼ら以上に貪欲に学び、自分自身コアコンピタンスを身に付けることが重要だと感じた。

(N.S.)